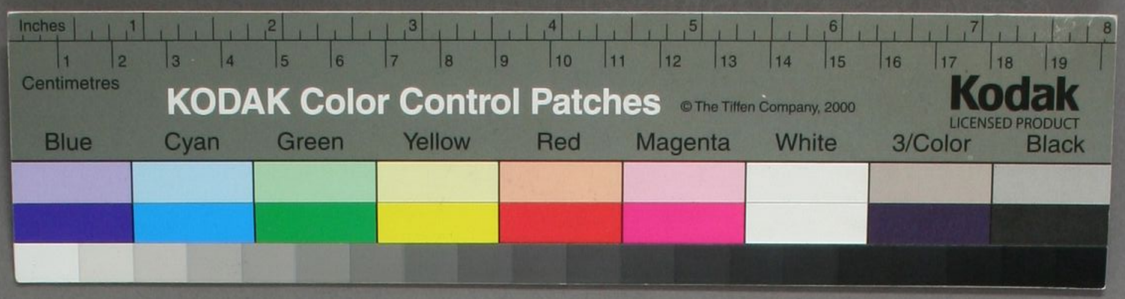
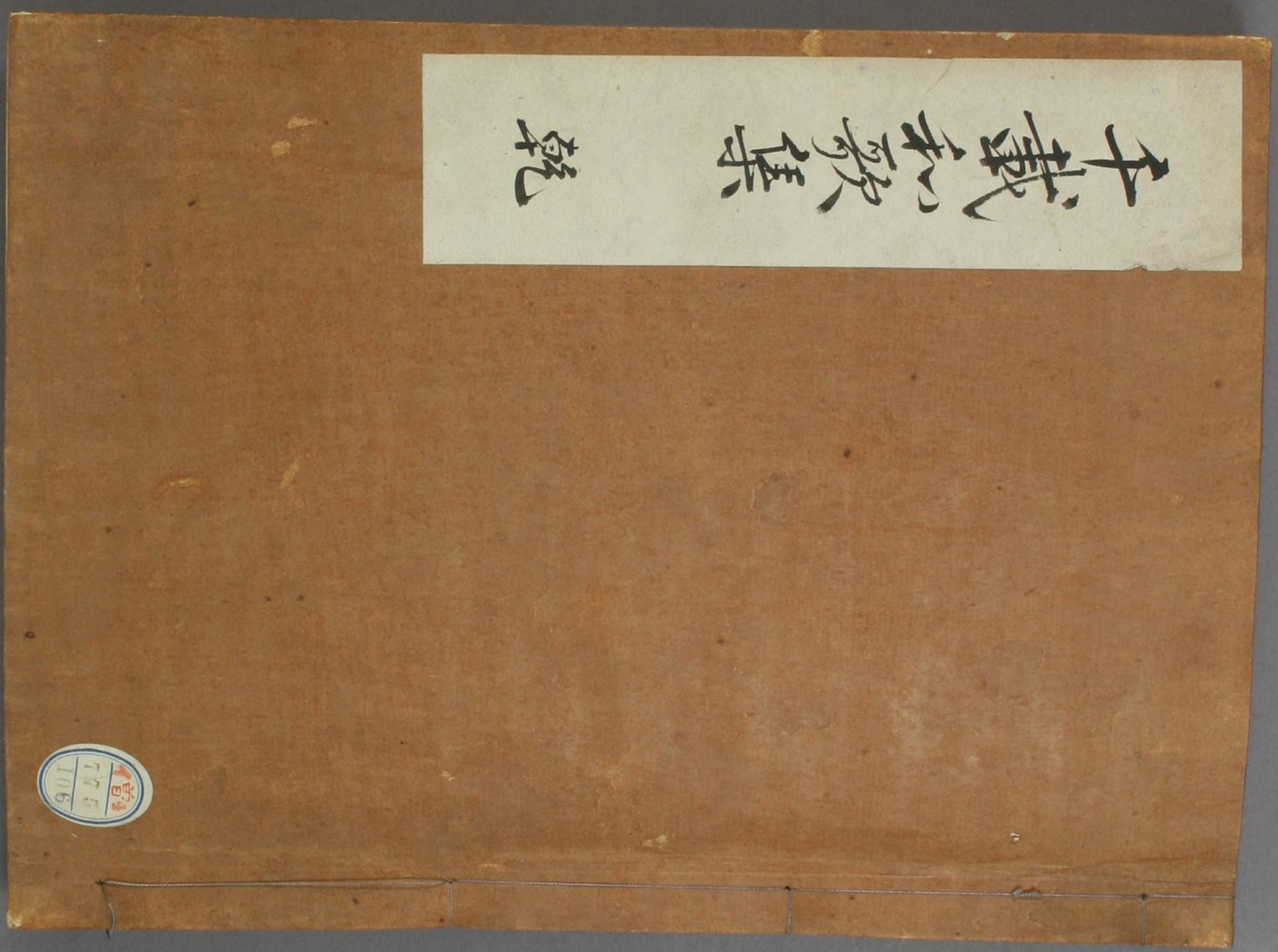

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black


千載ずれの
佳人
就中

會 775 106

千載和歌集巻第一

春哥上

源俊頼朝臣

松川院治時百首哥

中納言国信

待賢門院堀川

よめる

道あめにいとひし物と山ざとの雪
　　菜摘ます昔の袖や今宵とも

春あさき山のかすみや淡路島かよふ千鳥の泣くなるに
　　藤原敦頼朝臣

山ざとは雪のふるやとおもふまで花さきわたる志賀の都人
　　大納言経房

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり
　　源俊頼朝臣

春くれば木ずゑをつたふ雪とけて谷の小川ぞ岩こえてなる
　　前中納言匡房

右大臣家歌合に、初春の歌
　　権中納言俊忠

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり
　　源俊頼朝臣

白川院の御時百首の歌たてまつりけるに、春の歌
　　前中納言匡房

わがやどの池の水鳥も春くれば花ちりかかる心地こそすれ
　　刑部卿頼輔

春くれば木ずゑをつたふ雪とけて谷の小川ぞ岩こえてなる
　　大納言経房

見渡せばそこともわかぬ霞かな梅の山辺や花の山もと
　　左衛門督隆房

百首の歌たてまつりける時、子日の心をよめる

待賢門院堀川

家を伊勢の女房のもとよりぬうびとつかはすとて

女房まろかとおもひてあけたれはあやめをそ

うつ山ほとゝきすかなく

江都卿迴後

堀川院の御百首の時

郭公

ほとゝきすいまこえそめてしのゝめのほかの

山ちにかたらひてなく

五月雨の空とをつかさへ神のおれめの

ひまの雨とをつゝきなる頃安乃梅を

おりてつかはすとて

権中納言俊忠

咲そむる梅のえだをもとめえてとゝへとゝへとゝへとゝへ

梅

梅のえをたれもとをきてそかさゝんとゝへとゝへとゝへとゝへ

梅の木をのかきねにうゑをきてとゝへとゝへとゝへとゝへ

左京大夫顕輔

むめかえを折つゝ君にをくるとて

永保二年二月庚申

よゝ経ともよゝ経ともよゝ経ともよ

よそひをそふる梅花をれるをみて

崇徳院御百首の中に梅月

梅の花ありてかつしきつれい衣と見るまでにほふ月かな

大納言門

春の雪まだきえやらぬつま木のやうにも人のおもはれ

いけるかひなし

権中納言俊忠

ひさかたの風や吹らむ花の色のよそふるまでにほふ春の雪

皇太后宮大夫俊成

百首の中に梅月

春の夜の月のまどうちかすめるはそれとも見えず梅の香ぞする

源俊頼朝臣

ふり捨る雪の袖かと吹まがふ風の梅よりさきと思ひけるかな

崇徳院御製

梅花薫衣

梅の香にとりの袖をとめくかなれてもなほまよひぬるかな

新古今

むめの香をよそふるかぜのつてにだにいかでか君に我をしらせん

右のおほいまうち君

梅の花の題を

二条院讃岐

梅の花ちるをばをしと思ふらんまだ見ぬ人の心にぞ問ふ

権大納言実家

風ふるるそでの香よりも梅の花ちるをばをしと思ふらんまだ見ぬ人の心にぞ問ふ

中院前内大臣

大納言定房

藤原基俊

前中納言匡房

松川流の山村百首よりもみぢ

松川流の山村百首の中

藤原清輔朝臣

源俊頼朝臣

左兵衛督実定

源頼政

祝都宿禰成仲

茨原寺通翁

栄法院如月製

待賢門院堀川

徳大寺左大臣

栄法院沙月製

為仕る所のあるように
かつるさとといそうめ狂ふ花の
寛治八年三月十
従内大臣家の前合
山櫻
中納言女王
花散へきかちらぬ山さとのうら
春風の吹
筆をさしおくと
よみ侍る
花散里
従二位行権中納言藤原朝臣
櫻
春宮大夫公実
咲ぬれは花のかつらの雲ゐまて
毎朝見花といへる心を
春山の花見侍る
中院右大将
春山の花見侍る
右大臣
ふりにけるしるしやあると
十首の中人のよろ

みる人の心をむる桜かな　　素行

紫流る百首の外をもる村雨かな

かはらやたう沼の山の桜もやそのゝ色をそふるらん　　たゞ京

山桜実こそ有るうりうりと風そよぐ　　素堂

神かぜや宮の山人春ごとに　　芭蕉法師

夜思山花といへる心を　　仁和寺なる人

花もすゝ花の匂ひと思ひやるいちやかすみの籠もり　　道通法師

為源山花といへる心を　　松永貞徳

さそはれやとちの実ぬる山家より　　松政茶右大臣

尋花日暮といへる心を　　深草頼朝朝臣

雪とそぬうへさいかれやはる雨

花の雫をそ聴る

花ならぬ山路もまよふ雨模様　　道円法師

賀茂の社の千会そくくもる村雨

　　芭蕉

手を洗ふ雫一桜のもと　　森原之衛朝臣

春日の社の行合そ人くよろこぶ

吉野川みるさへさしも恨とや花の白浪

花とよる人こそ

うき浪やちるを待ける山さくら

日吉の祭一つの行合そ人くよろこぶる

祝歌 前参議成仲

吹かよふ花の匂そ菅の根のみちそ久しき

賀茂成保

うき物のみとや桜を思ふらん白浪

とよる人こそ

吉野山花をさかりと成ぬる山ぢとうかる雲

前参議雅業

毎年花前といふる行合そ人くよろこぶる

源仲正

春とへと匂ひとまれる山桜ちるをいとふ心ありやは

百首哥たてまつりける時よめる

待賢門院かくれさせ給ひて

白雲と峯の桜いとはれて花ちるをのみ思ふ心か

大納言典侍

花のあるよそへてそ見ん春霞たつらん山の名にはかくれす

春歌下

鳥羽殿にて水上花といふことを

白川院御製

ながれ来てそれかとぞ見る山吹の花いかだ
とおのこともはべりけるをもよほしける

院御製

ながれ来てそれかとぞ見る山吹の花いかだ
きしなる沖は波こすらしも

池水に浮かべる花を

大文第六段大尽

池水に浮かべる花のうきたるを
山吹の花と思ふ春風

天保六乙未秋閏七月朔日於豊嶺山以彼藏本寫之　中村直道

白雲と峯ふかくして桜もちれおりてふかきある
百首の句をもちる花の句うて

菅野山ちかき今うえに雲もりなくおる雲路うえを
寛治八年ゆきおれわなおおいまうち君のち
湯院の宴の折合の桜紙ある

内侍周防

山桜打しむれおいくなうちる花おりうらむ
後朱雀院の山村うへのことひんう山の
花見給ちる雨のふりにれを白川殿とまり
くちのくく折ちる給ちるみ給ふる

大納言長家

春雨と散花みをハかなうしを一定のちをれ
前花酒山路といふる句紙ある

赤染衛門

如何にせんふまそハ桜もむかるる山桜の歌
松川院のおまお百首の句をうる折紙
ちある

前中納言匡房

山桜あくのうるくふをもちるふてやちむ

藤原仲実朝臣

花ちうるうるめ桜かをちきる

権中納言基俊

春と思ふく花ありまやたれ山桜の風を桜ちと思ふて
崇徳院の位時十八首ちる句をうる折紙の句

嵐吹ゝ雪ふる山ざとのゆふぐれ
　百首の歌たてまつりし時よめる
　　前右兵衛督公行
来ぬ風もあるものを山ざとの花ちれと雪を降す夕暮
　花の歌とてよめる
　　藤原親隆朝臣
折ふしも花ちる春の山風は吹きぬる跡ぞ雪ふりにける
　花前言志
　　右近大将実房
ちりかゝる花のあるじやたれなれば春の心をとふ人もなき
　落花の心をよめる
　　権大納言実国

あらそはぬ神代のうゑのまゝなれば久しき世にも春を見るかな
　久我内大臣家にて花の歌よめる
　　権中納言通親
梢ゆく春とも見えぬ山ざとは花のみ雪のふりしきりつゝ
　　俊恵法師
花ちらす山下風や梢よりあれゆく春のしるべなるらん
　　源有房
一村はおぼつかなくも山ざとの風のやかたをしるべせよ
　　道因法師
ちる花と見ふりまがふ雪ながら手もたわゝなる春の夕暮
　　覚盛法師
あらそはぬ風ぞ吹きぬる梢ゆく春の夕暮

山桜花をみくまの浦にて

源仲正

花の色をとふくまの浦人いかゝあるらむ

よそにそも雪とのみこそ見えわたる

道永法師

池に桜の散もぬのまでそ菊一つ咲

桜ちるあたりの風にいをたゝむ

能因法師

春深淵あさきにかへるうぐひすの

山風に散つむ花をいかゝせむ

花園左大臣

山家落花といふことを

谷河水

花のちれちりてうなゐ山さくら

花前喜婦といふことを

前大納言俊実

春々は花ゆゑいとゞ来る人を

みちの国の戸かりもる特ありその関そ恨ちり

源義家朝臣

吹風をなこその関と思へとも

道もせにちる山桜かな

僧都観賀坂上

ちるさくらひしりの道のうもるまてそ

源仲正

百首の中より

鏡山ひかりにほふとをちかたの

人もや知るらん関の清水

　　前大納言為家

関路月

思ふこともえ寝さらふ関の戸の

あけ行く空の月の影かな

　　従二位為子

旅宿月

こころひく袖こそ湿れ草枕

ゆふべの雨に月を待つまに

　　前大納言為家

百首の中より

きくたびに袖のみぬるる時鳥

なれや初音の数をつくして

　　従二位為子

弘長二年百首歌奉りける時

道とほく入野の雲のつれなくて

　　権大納言公雄

松川院の御時百首歌たてまつりける

春ふかき井手の川なみ

　　前中納言匡房

歌合の時

やまぶきの花咲きにけり井手のさと人いかばかりとふ

　　権大納言公雄

松川院の御時百首歌たてまつりける

　　二条太皇太后宮肥後

九重に重ね歌を絶つ井手の蛙もわれもとぞ鳴く

　　あら玉歌合

右勝

　　前大納言公衡

いかばかり雲のやへふく風ぞ吹く月の桂の花の白波

　　藤原定家

歌の浦に波よする夜の月影は入江の蘆の一重なるらん

　　前大納言公衡

歌の浦の波の上こそ吹く風の雲のやへたつ月の桂の花

三月廿四日夢庵原玄旨俊盛のもとより誘て
つのくにに
花ハみな散はてぬ嵐のあそ山ひとりや春をおくらん
同三月廿五日よりこゝに
花のいろかすみのうちにかくれつゝ
海路三月廿五日
権大僧都覚忠
前大僧正覚忠
松川院のほとりにて百首の中に
前中納言良房
法師ともとの心を
前安大河内
をしへおくことのはしもなくさめき
乙未年閏七月二日於豊嶺山書室之　中村直道

千載和歌集巻第三

夏歌

堀川院の御時百首の歌たてまつりける

前中納言匡房

ほととぎすなくこゑきけばわかやどの
花たちばなのかをとめるかな

法眼基俊

ほととぎすなくやさつきのあやめぐさ
あさかきみだるゝ恋もするかな

崇徳院の御時百首の歌たてまつりける

藤原実清朝臣

あやめもしらぬかたへの人や知
たゞ京ちまで郭公

むらくもまでもる堀の御門の月ぞすみのぼりける

皆見御門といへる心をよめる

右近大将実房

おぼつかなくれ竹の御門のさけりけり
御垣ぞよみ侍る

仁和寺後入道法親王

ほとゝぎすなくこゑきけばわかやどの
花たちばなのかをとめるかな

白川院の御時百首の歌たてまつりける

前大僧正慈円

ほとゝぎすなくやさつきのあやめぐさ
あさかきみだるゝ恋もするかな

法眼重通朝臣

忍くもる人しれぬ御門や白川の関
遠村郭公といへる心をよめる

賀茂祭

あやしきまでに人うの部
　　　　　　　　　　　　道永法師
　　　　　　　　　　　　康資王母
　　　　　　　　　　　　刑部卿頼経母
　　　　　　　　　　　　覚盛法師
　　　　　　　　　　　　栄西誠教長
　　　　　　　　　　　　権大納言實家

　　　　　　　　　　　　仁和寺法親王守覚
　　　　　　　　　　　　前大僧正慈圓
　　　　　　　　　　　　法然法師
　　　　　　　　　　　　法性寺入道前関白太政大臣
　　　　　　　　　　　　右大臣
　　　　　　　　　　　　時房
　　　　　　　　　　　　前大僧正慈圓
　　　　　　　　　　　　栄西法師
　　　　　　　　　　　　仁和寺法親王守覚

藤原俊仲朝臣

五月雨のあさくもぬまのかれつつうきにしなれぬる

崇徳院の百首の歌とてよめる

左京大夫顕輔

六月の晴れ間まちいでて植ゑし田の面の稲葉風渡るなり

前参議教長

五月雨のふるさと寒くなりまさる軒のしのぶに音絶えて

皇太后宮大夫俊成

五月雨の梅のふる雨いたづらに年の古江の蘆まくら人

藤原清輔朝臣

五月雨のあまりみこもかれにけり沖の石まの忘れ草

待賢門院安芸

五月雨の雲の絶え間をながめつつ物思ふ袖に月宿りけり

五月雨の空もとどろに郭公いかに鳴く音ぞ雲の上まで

源頼朝朝臣

五月雨は滝の水まさりけり

源仲正

五月雨の雲まの月のいでしかば待つ夜ながらも明けぬるかな

賀茂成保

五月雨のふりそめしより山田もる賤の苫屋も漏りぞわびぬる

桜雲伎資賢

同納言

あふ坂の山はなをあらし風や宮こうぐひす後一条の御代八講こと花樹院よりいでゝ給ふ

かすが野にそかとも見ひ初をむ時雨の後の梢なれはよる

律師学遅

玉鉾道ひろうこゝろ広瀬の上人雲井寺の房ゝく未能郎ともいふ

人をとゝ給ふる

源俊頼朝臣

かこそうく思ひ初をむ時雨の後の梢なれはよる

堀川院の御時百首の題を奉りける次でに

権中納言匡房

さゝ原やそよ吹風に雪ふれて夜半に更ぬる山のかけ哉

権中納言俊忠

思ひ初る後忘れしものそよる

宇治前太政大臣

藤原教通朝臣

大原や小野の里人よもすから

宇治前太政大臣

さ月やみやまの雲にまかふらん

権中納言俊忠

思ひ初る後忘れしものそよる

宇治前太政大臣

藤原教通朝臣

大原や小野の里人よもすから

小萩ちる庭の秋風身にしみて
　　夜毎に月のやどる袂は

萩原敦仲

立秋後野外眺望

夏衣うすの野原をふく風に
　　秋をしるべき袖のすゞしさ

萩原親盛

秋風に浪こそたゝね高砂の
　　松の緑も一つ色なる

利根川水楊奇会

行く水に数かくよりもはかなきは
　　思ふ心をしる人のなさ

前参城教長

いにしへもかくやいふらむ月毎に
　　もみぢそそぐ龍田川水

萩原秉通朝臣

紅葉ちる高雄の寺の夕嵐
　　ふもとの里に秋風ぞふく

萩原親成

いにしへもかくやいふらむ月毎に
　　もみぢそそぐ龍田川水

萩原秉通朝臣

紅葉ちる高雄の寺の夕嵐
　　ふもとの里に秋風ぞふく

中村直衛

千載和歌集巻第四

秋歌上

待従のめのと

秋来ぬと風の吹かるる

二条院讃岐

秋ごとにうき事しげきわが宿は

あさぢふ荻をもる月ぞある

百首の歌をたてまつりける時

待賢門院のわらは

秋ふかき森の下風吹くる夜は

置く白露をおもひこそやれ

皇太后宮大夫俊成

八重葎しげれる宿をきてみれば

初秋のかぜをあるじ

寂蓮法師

物おもふ袖の露かな

初秋の風

秋風や吹くらむ先をながむれば荻の葉ごとに

源俊頼朝臣

秋風のふくにつけても人の

七夕つめにや袖をかすらむ

秋かぜの吹くにも荻の葉ごとに

露かとのみぞ人は見るらむ

秋ふかき野辺に来てこそ

源俊頼朝臣

荻の葉をそよぐ風の音ぞ聞く

秋山の雲吹く風をたよりにて

都に今や荻の初声

大蔵卿匡房

秋風の吹くにつけても

源俊頼朝臣

荻の葉ごとに露ぞ置きそふ

秋ふかき野辺の荻の葉

皇太后宮大夫俊成

七夕おんの中やくうるく
百首の奇をもる附七夕のんをもる
大納言濃季
七夕の天津ひこ星紅風よ牛のねのつと出松虫し
城川流の以時百首の奇をもる附よる
二条太皇太后宮大肥後
七夕のあまをそひてもわぬ夜やねむもるん
前安大河内
悪くこころひ斗や七夕のん紙よる
七夕まあまよるうるの岩
源俊頼朝臣

百首の奇をもる七夕のんをもる
崇徳院御製
をるをるふ乾をの衣ぬよるも
七夕のね朝のんとよるる
太政門左大臣
天の川んをみく村ふ神うめるれあつまて
城川流の以時百首の奇をもる附かるやを
淡路
大納言師頼
秋ね風思ひ報てこるるめ下ちや人めんるうん
親王家中製
をものへく等をお上と吹風をえもるる野をめるや
雲居寺瞻西上人房まて奇合一俊もる附ある

[illegible]

萩原道沈

[illegible]

秋きぬと風も涼しき山さとの
朝ごろも

淡人久子

いつもれと上葉を渡る秋風よ
[illegible]

和泉式部

今もかなへもきうせも萩うゑし
秋山の梢のとをむうらみかな

萩原行家

藤原[illegible]

[illegible]

長覚法師

神よ梅ふ八萩う散ら

[illegible]

坂川流乃村百首の内萩を

大納言師教

[illegible]

法性寺入道前太政大臣

[illegible]

前中納言雅兼

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず

吹風の枯野の草のかれがれに
なるとはなしに見ゆる白雪

前太政大臣家

題しらず

藤原盛方朝臣

いつる山と思ふ
枯ぶせる右大臣家の子出のあたりより
松川流の出村百首の内冬の時

源俊頼朝臣

さえくもる冬の夜空のさむければ
雪ぞ風吹くとしるらん

皇后宮大夫俊成

秋くれば宿をとふとも跡もなし
百首の内冬の時

藤原季通朝臣

野辺をなのへ枯ぶせる草の
ふかきをわけて
雪ぞ降りしく

源俊頼朝臣

深山には松の葉分けて
降る雪の
消えてや人の
跡を絶つらん

前太政大臣

野辺には霜枯れ草の
下ながら
春を待つとも
知らぬ雪かな

二条院讃岐

秋ふかきあさちふすゝきかるかやの風のさむき

前大僧正覚忠

月の前あまた波ありうつる

秋ふかきのゝとにたてるすゝきのほにいでゝ

月乃前於前ゝ也俗ゝ村ゝ俗ゝ

法性寺入道前太政大臣

秋乃月なかるゝ雲のあるゝにて晴行空の雪吹拂ふ嵐乃山乃前の雪

堀川院乃御百首乃中乃冬乃村ゝ

源俊頼朝臣

末松乃雲吹拂ふ嵐乃山乃前乃雪

陸奥住人

いたづらにふりつもれとや冬ごもり

物思ふ袖乃上乃雪

前太政大臣家乃御百首乃中乃冬乃村ゝ

かねてより月乃ゝ雪乃ゝ

月乃前乃雪

藤原隆信朝臣

ふかき山乃ゝ雪乃ゝ

月乃前乃雪

前中納言雅頼

ふかき山乃ゝ雪乃ゝ

月乃前

月みれはちゝに物こそかなしけれ

我身一乃秋乃ゝ

右大臣

月みれはちゝに物こそかなしけれ

我身一乃秋乃ゝ

あすもこむ松原かすむ山川に
　百首の哥よむ月の哥とて

源俊頼朝臣

むさし野の風さえ晴てきりぬ秋ののの月

大納言公実

さ衣のうら〳〵冠吉の方松よりいづる月はかげうつるなるらん

皇太后宮大夫俊成

石ゐ水こほりも閉ぬ冬ながら空すみわたる月の影かな

皇后宮肥後

注性等入道前太政大臣月五首の哥の中に

　　源俊頼朝臣

秋ふかき山ものとをもる月ありと見ぬ人こそ袖をぬらせ

源俊頼朝臣

見ぬ人のためとや月のやどるらん山ぢの松のかげもさやけき

藤原道経

都をば霞とともに立しかど秋風ぞ吹白川の関

注性等入道前太政大臣月五首の哥の中に

大宰大貳重家

遠さとも言はじ此ほど白川の関もる月を見てこゆれば

右衛門督頼実

月前雪といふ心を

雪ふりて月さへ冴ゆる夜半の空
　海も一月といへる心ばへなり

後惠法師

深めやる心もそらにふる雪の
　賀茂社の神垣の内
　雪の降るまで
やどり木の深くもまよふ梢かな

前中納言長方

石ばしるたるひの水の音さえて
　雪や降るらん月のかげもり

藤原家隆朝臣

月前氷といへる心を

頼圓法師

月影の冴さえわたれば浅茅生の
　月影荒れて霜ぞおきまさる

藤原親盛

あさぢ原すゑ遠く結ぶ霜の上に
　月影荒れて霜ぞおきまさる

藤原清輔朝臣

ふるさとの荻の葉風に夢さめて
　月影荒れて霜ぞおきまさる

刑部卿頼輔

為ふさの秋の夜ごとの月かげも
　霜ぞおきまさる秋の寝ざめに

大宮前左大臣

秋の夜の月のひかりしあかければ
　霜ぞおきまさる袖もさえつつ

なびきくらしとよみ侍ける

法性寺入道前太政大臣

もゝかはの月をおしみくらすかな
あかつきの夢とや雨の窓の月

源俊頼朝臣

豊明の庭やふるらん山の滝のみ

同七月五日於豊嶺山等之

中村直衛

千載和歌集巻第五

秋歌下

大蔵卿匡房

逢うるとてあらはまことも幻の
恨川流れ出でし前の百首の前書

藤原仲実朝臣

山ざとはひとかもなきか木枯の
業徳院より百首の前書

藤原季通朝臣

秋の歌とて松を読める風あるや
法性寺入道前太政大臣の松ならで
分くる袖の安き間も

藤原時昌

寒さもこうこう松のそく竹の
来暦二年月書の奇今ふる

荻窪西安朝臣

松ふれよの萩原吹風
城川流乃村百首奇もり村

二条大宮左府肥後

えもいわ山おろ嵐ふひ
ふ雨ふく過やすへふ
をつら寸

大納言公実

物乃秋いおる尾ふるく

相仁乃みふ

藤原時昌

田人乃山さとて麻ふ物ときてよみ侍る

源俊頼朝臣

ふる庭乃侍者八琴へふき
百首乃奇をり村ふる

待賢門院乃かり

乃庭おふ松ふひき
秋泊来とんと侍る

前刑部卿範兼

ふおと川うふ松来ふ
うき不をふいるおれふ

藤原隆信朝臣

秋とふれふる

後鳥羽院

道円法師

覚延法師

九条実俊卿

花山院忠定

注下総国

後恵法師

道円法師

賀茂政平

惟宗広言

長覚法師

寂蓮法師

読人しらず

新三十六人撰

読人しらず

秋門のれてをひらく碧
空のきはわさらうとくに明を立なる　　雍蓮法師

秋の秋の衣八雅をろる物と秋のこゝろかく
出雲松一てといふこゝろ　　芳恩寺朝臣

雨くおもふ秋の色はの雲と衣一枚ころもつる
百首奉行　　大炊御門の右大臣

夜とかなる　　村雨秋の
雨とかなる　　村雨秋の

うりくそおをくの
秋山院御製

保延の秋もしかりくと
今さて後の
うりくれなゐの色も生ふ
野ら今
出の雪とまれる風ぞ秋ある月の影る

式子内親王

第七番　秋

俳冷泉流の山村九月十三夜月高俳
俗なる

法橋□□道茂
残菊をめる

家さかれきりぐす霜をいとふ
月照菊花といへる心をよめる

内大臣

白菊のうつろふ秋の夕暮は
籬の菊もいろまさりけり

前大僧正慈円

雪のうちの籬のこ松ひきしめて
菊もおらでぞ見るべかりける

祐盛法師

折つくる籬の菊のかげよりも
霜おく袖ぞ色まさりける

前大僧正慈円

百首歌奉りし時菊をよめる

皇太后宮大夫俊成

白菊の花の上こそ月と共に
秋の心を染めまがへけれ

摂政太政大臣

白菊の花の上こそ月と共に
秋の心を染めまがへけれ

皇太后宮大夫俊成

白菊の花の上こそ月と共に
秋の心を染めまがへけれ

藤原基俊

白菊のあかぬ色香もおりからや
霜おきまよふ園の夕暮

仁和寺法親王覚性

初時雨ふるとはなしに山の色の

寛恵法師

素意法師

小弁

素意法師

院御製

左京大夫顕綱

大納言実房

法皇方丈にて
和歌を詠ず
よもすがらかたりあかしつ
ほととぎす
初音をまつと
ねぬ人のため
湖上雨落
さ波やひとつ根の山おろし
百首の中を
藤原清輔朝臣

嵐のさそふ花の
権中納言実守
越山を
九条前太政大臣
松の
従二位家隆
白川の関
刑部卿範兼
山おろしと海は
藤原清輔朝臣

高山雲外
嵐
覚盛法師
大井川
上綺流
村禁
藤原清輔朝臣

大井川
嵐の山
従二位家隆
大井川
嵐
道円法師

宗徳流吟製

山寺秋雪といふことを

さゝめ雪ふりしきてと山寺の秋の雪とをきゝ

雲おもき九月末の夜半の雪今朝ぞ降りける

前大僧正覚忠

かつ消てなぬかたらすて初雪やまた山寺の秋とけぬらん

源俊頼朝臣

散もせぬ秋風をつれなくふきはらひそふる

兼房二条関白家歌合に初雪の心を

白山の雪のみちをきそふれは秋もありとも思はさりけり

百首の歌たてまつりける時九月尽のこゝろを

こゝろひて秋にうつれとさくらはな

乙未閏七月六日豊嶺山荘ニ

中村直道

冬哥

堀川院御時百首の哥たてまつりける時初冬の心

大納言実

堀川院御時百首の哥たてまつりけるに初冬の心を

源俊頼朝臣

雪ふり嵐はげしき山ざとは木の葉しぐれて冬ぞすくなき

藤原仲実朝臣

いつとなく嵐のさそふ木の葉かな雨ともいはず雪ともいはず

百首の哥めしける時初冬のこころを

紫徳院御製

ひまもなく散るもみぢ葉よ埋もれて庭もせにしきおりもおり

大納言隆季

雨ふらばかさをかさんと思へども木の葉にくもる山のはの月

大納言忠教

もみぢ葉をふきな散らしそ山風の吹くだに秋のかたみなるべし

藤原教長

秋ふかき嵐の音を聞くからに木の葉ふりしく庭ぞさびしき

皇太后宮大夫俊成

山家初冬といへる心を

いつのまに霜をかさねて山ざとの木の葉ふりしく庭となるらん

前大僧正慈円

和歌の浦に嵐の吹けばしきたへの袖さへさえてころもうつなり

百首の奇をもろ〳〵府 初冬の奇と読給る

大枝沙門空大居

初霜や垂こめこもる窓の内 ゆふべもありれ
明ル暁の月 百首奇をもる附よる

末中納言定房

ちる柳葉上の残る雪もなく 霜や冠らん
藤原基俊

枯ぬると見わきもなく霜の白 ゆふべもありん
前京宰相

冬ごもり一夜二夜とむすぶ手を 松ふく
野ら吹
霜さえて梢の雪へるもの 月ぞ冴ける

馬内侍

江村入遠木夜台内大臣給る附る 初冬の奇
雪を詠る

寒江なりく紙ぬるも時雨れもの松原のよの深みか
紫波院る百首の奇そ

皇太后宮大夫俊成

冬ごもる松の松やも深らん 附雪の河そもめる

仁和寺法入道 注親王

小柴ちるこもりなくやふる雪の山ふもと
時雨といへる 附次時雨

権大納言長方

秋の風やうらみもはてぬ夜半の月

藤原俊成朝臣

うたゝ寝の夢やうつゝの音ならん

村雨ぞ袖

山ふところの雲のした水

源師光

村雨のとちの木山葉つたふ雲かくれん

道因法師

嵐吹ひらの峯の松風

松川院乃治百首の時

中納言国信

海山をわたる村雨くもるなき

秋

木の葉のこらずなりぬ村雨

源俊頼朝臣

ゆふされば衣手寒し村雨の降りてや山の色を染むらん

参議雅経

二条太皇太后宮大弐

村雨つゝみもあへぬ山の端の月

後京極摂政前太政大臣

村雨つるやいなばの露の玉

藤原定家

むら雨に洞のうら花散しきて山家村雨といふ名をや

源仲頼

水鳥の羽音も寒き夜半の霜　　素中
百首の句ごとに鳥を折敷ける　　其角
こんもりとせしのうの森を春の雨　　素堂
雁渡る入江をうつす初汐かな　　杉風
とりもなほ森の高やに春の雨　　桂中
鳥の声こそ淡き時雨かな　　道圓法師
時雨ふる入江のあしをかれのこる　　宝井其角

霧こめて雁なき渡る入江かな　　素堂
暁の眠やさめん月の雁　　杉風
水鳥と浮かぶもの哉と押あるく　　源親房
かもとやとりもの哉と押あるく　　常武
鳥とみるやそもそもの哉と押あるく　　常武
松門読の百首の句をもつ付ける　　其角

宗法法印製

藤原為家朝臣

藤原信実朝臣

藤原資経朝臣

仁和寺法親王

第参拾弐番

前大僧正慈円

源俊頼朝臣

二条院讃岐

二条院御製

法印定為

治部卿通俊

藤原為忠朝臣

前大僧正慈円

源俊頼朝臣

二条院讃岐

二条院御製

法印定為

治部卿通俊

藤原為忠朝臣

仁和寺法親王

第参拾弐番

民部卿親能

中村直遒

天保六乙未年冬十月七日於豊嶺山写之

離別哥

藤原実方朝臣

有国大弐まかりくだりける時に

第六句言ひ住

第六句言ひ住

入道前太政大臣

人々歌よみ侍りけるに、海の辺の秋曲といへる心を

かくとだにえやは伊吹のさしも草さらばわれのみ燃えやわたらん

藤原定家

百首の中に、海辺月といへる心を

山のはもなみもひとつに見わたせばいづくをしほの月の出づらん

中村直道

羇旅哥

題しらず

藤原範永朝臣

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

法性寺入道前太政大臣

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟

中納言師俊

ふる雨の空のけしきに降りぬべし雲ゐる山の麓ならねど

藤原基俊

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ

海のうち玉水の浦とうたひ
　　中納言國信
　　松原書くいくるかと
　　八条前太政大臣
とまくまで風さえ初るあれやまや中山
　　海辺にくれてくるゝ秋かな
　　和泉式部
うちわたすうなひかれぬとて八橋(ヒイ)のとをき
　　舟なれはうかうかとのる秋の月
　　前参議朝光
思つるかとやおもまし(そイ)ことの葉の
　　松は風よ伝へたのむと
　　法師
あつさのみして涼伝ふる
　　紀周防
夏来ぬあつさの松とふきはなの
　　大陽住そのかけ雨をさそひぬ
　　こまもとそそきもあへぬ
　　洛守有景
伝のえもいはれぬ(そイ)ものゝ数つくし
　　天仁元年五月廿日
　　安元甲寅
別れてもおもひをかけし玉井かな
　　法性寺入道前太政大臣の御供にまいりて
　　源雅光

源仲綱

大宰大貳重家

按察使基家

新勅撰

藤原定家朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中村直道

乙未閏十月九日於豊嶺山字大

千載和哥集巻第九

哀傷哥

[illegible]

[illegible]

春[illegible]

[illegible]

[illegible]

恒徳公くれ行く
中く行くとこそ
春とへく春ぞくれ
上東門院
おもひ
藤原道信朝臣
上東門院
源宣基朝臣
平雅康
前中納言匡房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上西門流無情

神歌法師

大江貞重朝臣

鳥羽院御製

久我内のおほいまうち君

大炊御門右大臣

死蘭の左大臣

みてせよとおれいいまでおんうつくしかるうる
ね入道注釈をうくれ行てはいるまで月をそそて
浜松うる
入めるうひぬ月のかう
おやのそうまかりくかうこんかれそうる
左京大夫俊範
空へうれ前の海や汲のむうの世をうつぬ苦かか
家方よ行後よりもうしたいつ川よ勇絵家て
分うれそうる
俊範朝臣
行年はるな思ひよ法をこりむりこうつこそそん
死前のた大臣の家よ書て分うを笠松と

分うそ行うり家うる物えとうなるあ
供去し分うる村うそんく分家る
法印成佐
思ひきやをふうう分行後の寺ふて物えとそへ八
うう分うる村母うさ行うんうと欲さおりひ
分家うとその多ひおこありてはえ母方うう
うそる時をる
釋浄法師
ひまもむして分うとを思ひうとれくと文うりう
国府を国文のうはいるまで
為うりうもうきていそぶてきう村うる
前内親感
分うと思うくいないそうる御法をうたく物うえんと

大和守法親王薨去の時
忘れ形見の墓所よりかの寺に山と雲かくる
心ありてや後の世を
覚蓮法師
山ふかみなく雲や初雪
父の中納言承長の前
うちつけにかくてよもる
年ごろ苔を西ふく心の
母北の方よりかの時
承長法師
多くの年やとまりて秋を
同じのと人和泉の
園城法師
秋ふれどもる
ふるさとを訪ふくて秋の月
和泉法師 功なりて
うつうつて帝位法師のもとにて
辛嶽法師
秋ふかみとうまうれ
尼一
園城法師
この世みてみちふまれかな

千載和歌集巻第十

賀哥

みこのみやたちにおはしましける時内裏にて
八条院内親王と申ける時うゑ木たてけるに
よませたまひけるに

院御製

我ためにうゑしまつとも君がよの
千とせのかげにかくれざらめや

院ノ女房

我きみの千とせのかげにかくれなば
うゑしまつさへ枯やはてなん

皇太后宮大夫俊成

我きみの千代のかげにかくれずは
うゑしまつさへ枯やはてなん

大宮前太政大臣

春の代のためしにひかん山ぶきの
花咲川の岸の姫小松

つねもとの朝臣

春ごとにうつる心の色なれや
花のあるじの定めがたきは

源俊頼朝臣

春ごとにながるる川を花ぶねの
行きてとまらば我もゆかまし

松殿入道前関白

春ごとにながるる水を花ぶねの
うかべてとまるものにぞありける

松川院御製

千年までおくるる小松引ぬれば
鳥羽殿ながらあかぬ色をぞ

大納言忠教

北そや梅の沖世おくとも人
百首の中の一首の詞

吹風をあらしといはで
二条院御製

春徳院御製

山久しき御代をきこゆる

世の中を初春とうらなへて百首
うたのとをるこそ

二条院御製

白雲のうちはるくくる

百首の中秋夕を

うら紅葉なほ秋ふかき山の雲風
秋深き夕日小倉の山の雲風
秋の中五首の中

百首の中恋

二条院御製

同和のま花乃家

寄月述懐

大政大臣

我心世とかさねぬ月の

千年經ぬる

入道前関白太政大臣

深通僧正

入道右大臣

賀茂成助

後一条院の御時長和五年大嘗会の悠紀方御屏風

白川院の御時承保二年大嘗会の悠紀方御屏風

ちくや神の御門のさくの内の花
琉球許河の久麥二月大嘗会悠紀方風俗
をよめる

ちくやまもりきの内へさくらかな

宮内卿永範

年ごとの大嘗会悠紀方風俗
をよめる

春ごとに代々の都のみやこ鳥
同四月大嘗会主基方稲春哥
よめる

あめつちのさかえをしぬる代のいろを
刑部卿範兼

あめつちのさかえをしぬる代のいろを
ときはの山のいはねとぞつむ

同大嘗会悠紀方の作
屏風のうた

宮内卿永範

霜のゐる野べもみどりの若菜かな
今上の御代を春日の野にたとへて大嘗会悠紀方の風俗の
哥よめる

藤原季経朝臣

ときはなるみどりの松のもとにしも
おのがちとせをかさねてやみん

天保六乙未年閏七月十日於豐嶺山写之

中村直道